第20号特別記念号刊行の辞

横　山　幸　三

わが『筑波英学展望』の刊行がこのほど20号目になり，21世紀のへき頭を飾る年に，「特別記念号」として出版することができたことを，まずは会員各位ならびにこれまで本研究会に関わってこられた先輩諸氏とともに慶びたいと思う。

本研究会は1979年度に発足したが，当初は筑波大学現代語・現代文化学系所属の専任教官のうち英語学および英米文学を主専攻とするメンバーで構成されていた。その後，学系の研究区分の改組に伴って英語学・英米文学グループが公的には一体化できなくなったものの，旧会員はそのまま同じ研究集団を持続して，今日に至っている。この間，定年退職や他大学への転出等で会員の変動はあったが，その都度新しく有力メンバーが加わり，発足当時の精神は連綿と引き継がれて，現在では主としてこの研究誌の刊行という形で活動を続けてきている。

ちょうど今から10年前に，当時の代表であられた山形和美教授が「第10号発刊の辞」で，この研究会の発足以来の経緯について書かれているので，詳しくはそちらに譲ることにしたい。ただここで改めて確認しておきたいのは，この研究会の基本的な性格についてである。それは単に，同僚が集まって年に一回原稿を持ち寄って雑誌を発行するということではないはずである。本研究会の発足は，いわば母体となっているわが筑波大学の建学理念にもつながっていた。そのことをわれわれは今こそ想起すべきではなかろうか。端的に言えば，何にも増して「学際性」の尊重ということである。それは無論，雑多なものの寄せ集めではなく，専門をしっかり踏まえた上で成り立つ学問領域を指しているのだが，そもそも筑波大学はこの「学際性」を標榜する新構想大学としてスタートしたはずではなかったのか。「学際性」こそが，旧来の他大学との違いを表現するキー・ワードのひとつでもあったはずである。奇しくも，「導電性ポリマーの開発」によって昨年度のノーベル化学賞を受賞した，わが筑波大学名誉教授・白川英樹氏のケースなどは，まさにこの「学際性」が見事に発揮された

象徴的な事例であると思われる。また，われわれの身近なところでも，すでに言語学の分野では特別プロジェクト・チームによる「東西言語文化の類型論的研究」が進行中である。その中心的役割を本研究会のメンバーが担っていることは，皆さん先刻ご承知のとおりである。もしかするとその成立にあたっては，この研究会の学際的性格が一役買っていたのではないかなどと，大変に手前勝手な解釈をしているが，そうなると我田引水も甚だしいとどこからかお叱りを受けそうである。

いずれにせよ，第20号の刊行という節目にその発足当初に思いを馳せて，これからの研究会の在り方について考えてみることは，本研究会の今後の発展のためにも決して無駄ではあるまい。というのも，日常的には自らの専門という殻のなかにとかく閉じこもりがちの研究者が，このような学際的集団を意識的に構成して活動することは極めて大切なことだからであり，さらには専門性を超えたところで新しい研究成果を生み出すことが期待されてもいるからである。その意味でも，本研究会における英語学と英米文学の研究者が互いの専門性を生かしながら，同時に場をひとつにして活動できるということは，まさに理想的とも言える環境に身を置いていると言えるのではないだろうか。従って，そう遠からずのうちに，われわれの間から新しい学際的研究が誕生し，やがてこの筑波の地にひとつの学風として定着してくれることを期待している。それが，新しい世紀を迎えて描いた筆者の初夢でもある。

今回は「特別記念号」ということで，執筆者の枠を広げて，旧会員の方々にも寄稿していただいた。お蔭さまで，論文だけでなく読み応えのあるエッセイを含めて，内容的にも大変に多彩なものとなった。ご協力いただいた先輩諸氏には衷心よりお礼を申し上げたい。

また，会員各位には今後も益々の活躍を期待するとともに，本研究会と本誌のさらなる発展を祈念して，『筑波英学展望』第20号特別記念号刊行の辞とさせていただく次第である。